お伽訓話

不思議な白

昔ある國の片田舎に太兵衛と慈助と云ふ年寄の兄弟がありました、兄の太兵衛は大層けちん坊でお金は勿論何一品でも人にやる事は大嫌ひ只々ためる一方ですが弟の方は其名の通り大變慈け深い心で少しでも可愛憎な人の話など聞くと自分の着て居る着物までぬいでやる事も度々でしたのでだん〳〵品物もなくなるしお金もなくなるしお米もへつてとう〳〵貧乏な〳〵暮しをするやうになりましたがそれでも少しも不足らしい顏もせず毎日一生懸命に働いて其日〳〵を過して居りました。

やがて其年も暮れ近くなりどこの家でも皆お正月の仕度にいそがしく慈助もか

せいだお金で澤山のおかちんをつきまして自分より貧乏で困つて居る人たちに少しづゝでも分けてやりました自分たちの分を少しとつて置いたの迄皆人にやつてしまいましたので大晦日の晩兄さんの家へ出掛けて行きました。

大きな立派な石の門を入つて兄さんのお部屋へずん〳〵通りますので下女たちは皆びつくりしてだまつて見て居る許り。

慈助『兄さん御不沙汰しましたね處でけふはおかちんを少しいたゞいて行かうと思つて來ました』

といきなり申しますと兄さんは

『慈助お前にも困るねあれだけの財産をなくしてしまうし其衣物はまあどうしたのだい、もうお正月ぢやないかおかちんもつかないとは可愛憎でもあるがほんとーにいくじがないねおもちも一枚位はやられるがあとはいけないよ』

と云つて一枚のおかちんを下さいました慈助はこれを持てうちへ急いで歸つて

來ますと途中に一人のお爺さんが休んで居ましたが其樣子がいかにもくたびれて居るやうなので慈助は

『お爺さんあなたどうなさいました』

とやさしく尋ねましたら

『あゝ私はきのふから何もたべないのでお腹がすいて仕方ないのです』

と云ひますので慈助は今貰つて來たおかちんを出して

『さあ〳〵今が之ありますから澤山あがつて下さい』

と云ひました其爺さんは喜んで少し許りたべて居ましたが殘つたのを慈助に返して云ひますのに

『あなたは實に感心な心懸の方ですから其お禮によい事を敎へてあげませう此木の奥に小人の國がありますが其國にはお米と云ふものがないのですから此おかちんを持て行くといろ〳〵の物を出して取かへてくれと云ひますが何とも取換てはいけません其内に一ツ古い少さい石の臼があるからそれ

ととりかへていらつしやい其臼は何でも自分のほしいと思ふ物が出ますからさあ此からお入りなさい』

と云つて木の根を少しあけてくれましたから慈助は無中でどん〳〵はいつて行きました。スルト成程お爺さんの云つた通り小指位の人がぞろ〳〵居ましたがやがて一人の小人が

『おや餅くさい』

と云ひますと皆が『おゝ餅くさいどこだらう』と云つて慈助の側へよつて來ました其中でも一番えらそうな小人が云ふには

『此國にはお餅と云ふものがないのでぜひ一度皆がたべたいと云つて居た處です。何んでも貴君のお望の物をあげますからとりかへて下さいませんか』

と云つて色々の寶物や金や銀をどつさり出して來ました。慈助はさつきお爺さんに云はれた通り

『私は何もほしくはありませんが此國には少さい石の臼があるそうです。そ

れとなら取換てあげませう』

と云ひますと小人達は如何にも困つた樣子で皆で何かごちよ〳〵と相談して居ましたがどうしてもお餅がほしいと見えとう〳〵取換てくれましたから慈助は大喜びそれを持つて元來た道を歸つて木の根へ出ますとお爺さんがにこ〳〵と待つて居て

『おゝよく私の云つた事を忘れずに取換へて來ましたね此臼はなんでもほしい物が出るのでそれを出すには

『石臼、小臼、金の臼お米を一升だしとくれ』

と云へばいゝのです。望み次第いくらでも出ます。

と云つたかと思ふとどこへか行つてしまいました。

慈助は急いでうちへ歸りました。そして早速お餅やら小供たちのよそ行の着物やらを澤山だしお米も出して貧しい人たちにも分けてやりました。それから別にお金を澤山出して貰つて家を立派に建てることにしました。

慈助が急にお金持ちになつて立派な奇麗な着物を着ても誰もうらやむ人はありませんでした。そして

慈助さんはふだん人を慈深くしたので福の神樣か舞込んでいらしたのだ目出度〳〵といつて他人迄も喜んで吳れましたがそれを聞いた兄さんはさあ氣になつてたまりませんきのふ迄あの貧乏がいくら福の神樣が來たつてとても己れの家には及ぶものかと獨りぎめして居ました

さて次の日曜が來て會堂へ行きました處が慈助は云ふに及ばず妻も娘の花子も太郎も三郎も皆立派な溫かさうな洋服を着うつくしいボーシをつけ新らしい馬車へ乘つて來て居ましたびつくりする兄さんの側へ來て

慈助『先日はありがたうございました御蔭樣でどうにか年もこせました家も少しは住よくなりましたから御遊びにいらして下さい』

と丁寧に云はれますので太兵衞も思はず頭を下げましたがさあくやしくてたまりません會堂の歸り道に早速弟の家に行つて見ますと少し處か自分の家より倍

も〳〵大きい石造りの立派な家に住んで居ますのでびつくりしながら入つて行きますとかねて主人のいゝつけと見え一人の可愛らしい女が出て丁寧に案内し美しく飾り立てた應接間へ通しお茶やらお菓子やらを出して來ました太兵衞は昔弟が來ても何一つかまわなかつたので氣の毒でたまらず小さくなり何扁もおじぎして居ますと弟の慈助が入つて來て

『まあ兄さん早速いらして下さつてありがたう實は其内皆さんを御招ぎしやうと思つて居た處まだ用意が揃はないのでのびて居ました折角いらして下つさたのですからゆつくり遊んで庭でも見て下さい御馳走も御望次第しますから』

と自分が昔苦しめられた事など忘れた樣ににこ〳〵もてなしますので太兵衞は

『慈助さん先達迄はつひ心にもなく氣の毒の事しました之からは又遊びに來て下さい』

と氣の毒そうに云いますので人のよい弟は却て心配しいろ〳〵の繪やら庭へつ

れて行つたり子供たちにピアノを彈かせたり兄さんの好きなおごちそうをしたりして一生懸命におもてなしをし歸る時は澤山のお土産を持たせ新らしい馬車を出して兄さんを送らせました。

太兵衞は道々馬車の中で不思議でたまりませんどうしてあんな金持ちになつたらう。あの位なら昔からもつと親切にして置けばよかつたとそれからは慈助の家へ始終遊びに行き其度いろ〳〵御土産をもらつては喜んで居ました度々行く内に慈助にどうしてこんな金持になつたのかと聞きますが慈助はいつも神樣の御助だと許り敎へませんでした。併しあまり何度も聞きますのでとう〳〵皆話して聞せました。

太兵衞はどうかして其臼がほしくて〳〵たまらなくなりましたがどこにあるかどうしても分りませんそこで弟に一度其臼を見せて目の前で何か出して見せて吳れと連りに賴みますので慈助も兄の賴みではあるしふだんから極く心持のよい人でしたから斷はる事が出來ず或日臼を持ち出して太兵衞の前で

石臼小臼金の臼リンゴを澤山出しとくれ

と云ふと美くしい〳〵林檎が籠に山もり出ました。

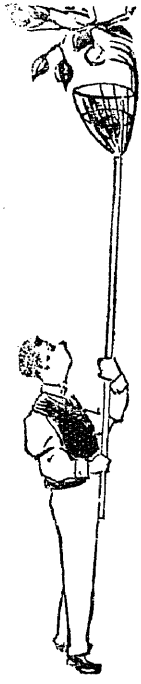
兄さんが花と云へば花、鳥と云へば鳥何んでも出ますので面白くもあるしほしくもあるし一日之をかして吳れるやう弟に賴みますとでは一日だけと約束して自分の家に持つて歸りました。太兵衞は家に歸ると直にお部屋へ入つて欲深ですからけふ中に王樣のやうにならうと思てお金を澤山出し、着物を出し、何一つ不足なくして此度は何にしやうかと考ひましたがおゝそう〳〵わしは猫のよいのが五六匹ほしい。

石臼小白金の臼猫を澤山出してくれ

ぐる〳〵〳〵休まずに

と云ひましたからさあ猫が出るわ〳〵あちらでもニヤーゴこちらでもニヤーニヤー〳〵〳〵見る間に座敷一ぱいになりました。

なにしろ欲深の太兵衞が云はなければよいのに『ぐる〳〵〳〵止まずに』

なんて云つたもんですからたまりません。臼のぐるぐる回はるに連れて猫の出ること〳〵大變でニヤア〳〵〳〵〳〵〳〵止めどなく出て來るので瞬く間に家の中は猫で一杯流石の太兵衞も之には閉口して早く臼を止め樣としますが何うして止めたらよいか分りません。仕方がありませんから在合の棒で叩いた所が臼を叩かないで出て來る猫を叩きましたから、サア大變叩かれた猫はニヤアーゴと大きな聲で叫んだかと思ふと太兵衞の喉笛に喰い付いたので遂々太兵衞は死んでしまいました。それと共に臼も止まり猫も出なくなりましたそれで臼は未だに慈助の家の寶物になつて居るそをで御座います。

めでたし〳〵〳〵